

近代真宗の「恩寵主義」に関する一考察

——多田鼎を事例として——

春 近 敬

「恩寵主義」とは、明治後期の真宗僧清沢満之（一八六三—一九〇三）の門下生である、暁烏敏（一八七七—一九五四）と多田鼎（一八七五—一九三七）らによって主に担われた思想である。清沢のもと東京の本郷で「浩々洞」と呼ばれる共同生活を送った彼らは、清沢の没後も東京に残って清沢の掲げた精神主義を宣布するために活動を継続した。精神主義は、「内観」と呼ばれる自己省察によって自らの罪悪性を自覚し、そのような自分に阿弥陀如来の現在の救済があると感得することを方法論とする。恩寵主義はこれを展開して、「成功も失敗も皆私への如来の諭示である、安楽も艱難も、共に私に下したまふ引立である。」（多田鼎『正信偈講話』一九〇七、九三頁）と、苦楽も物事の成否も全ては如来の思し召しであると捉える思想である。注意しておきたい点は、暁烏や多田が自らの思想を「恩寵主義」と自称したのではないことである。恩寵主義とは後年に「清沢以後」の浩々洞の思想状況を表して生まれた言葉である。暁烏も多田も、自らの思想は清沢の精神主義を受け継いだものだと考え、「精神主義」と自称していた。暁烏と多田の恩寵主義には相違がある。暁烏は「罪惡も如来の恩寵也」（『精神界』第九卷五号、一九〇九）という言葉に代表されるように、人間の為す善惡までも一元的に如来の恩寵であると捉えたが、多田は自らの罪惡性の自覚を主体とし、倫理的な善惡の問題を強く

意識した。暁烏が「煩惱の身のままに救われる」のに対して、多田は「煩惱の身にもかかわらず救われる」のである。そして、多田はそのような如来の恩寵を「恩」として受け止め、それへの報謝を強く主張した。彼らが仏教を語る際に「恩寵」という語を積極的に用いたことも、また恩寵主義の大きな特徴である。恩寵主義の勃興以前に、真宗の信仰活動において「恩寵」の語が使われた形跡は管見の限りほとんど見あたらないし、清沢も用いていない。真宗の主要な聖典（大谷派版『真宗聖典』ならびに本願寺派版『浄土真宗聖典』所収文献）において「恩寵」の二文字が登場するのはただの二回だけである。一カ所は道綽の『安楽集』に書かれた『大智度論』の引用文で、「報恩の爲の故に常に佛に近づくことを願ず。亦大臣の王の恩寵を蒙りて常に其の主を念ふが如し。」とある（『真宗聖教全書』一四一六頁）。もう一カ所は親鸞の『教行信証』「信巻」で、上記の『安楽集』の該当箇所を引用文も含めて引用したものである。さらに、仏典において「恩寵」とは基本的に王が臣下を庇護するように、人間を主体として用いられる言葉である。恩寵主義のように、如来を「恩寵」の主体とした用法は、この時代においては恩寵主義独特のものであった。

一方で、「恩寵」は明治後期にはキリスト教の文脈による Grace ないし Gnade の訳語として定着した。具体的時期は明らかではないが、一八八七年の明治元訳聖書では Grace を「恩寵」と訳している。多田は仏恩を強調する文脈で「恩寵」を用いており、またキリスト教に対しては概して批判的であるところから、おそらくは Grace 的な「恩寵」概念は抱いてい

なかった。しかし、アーサー・ロイドやハンス・ハースなど、二〇世紀初頭に仏耶一致論を唱えた人物が当時一若手僧侶に過ぎなかった多田鼎に着目し、彼の著書を翻訳したりヨーロッパに紹介したりしている点は注目に値する。キリスト教関係者が浄土教に一神教的な神観念を見いだそうとする試みは多田以前から存在する。しかし、浄土真宗の伝統的な因習から離れて内観による罪の自覚を重視し、全ては仏恩であると捉え、しかし暁烏と異なりあくまで倫理的悪は否定されるべきものとし、さらに Grace と同一の語となった「恩寵」という言葉を多用した多田鼎の恩寵主義は、当時の仏耶一致論者にとっては思想的に好都合な存在だったのではないかと考えられる。

横川顕正の『禅思想史』観

和田 真 二

横川顕正の禅思想に関する論考は余り多く存在しない。その理由は若くして逝去されたことに由来するものであるが、それでも、残された著作論文と、新刊紹介の書評を手掛かりにして彼の禅思想について少しく考察してみたい。知られる如く顕正は鈴木大拙の自他共に認める第一の弟子であった。顕正自身も学生の頃から熱心に相国寺（臨済宗相国寺派本山）で参禅されたことが伝聞されている。後には大拙にかわって禅の講義を担当している。顕正の思想的発展は概ね大拙のそれによる。

大拙著の英文『楞伽經の研究』を論評する中で「大乘仏教の

經典中には、その高き仏教經驗の含まれているにも拘わらず未だその全き研究の試みられずして残されているものがある。楞伽經の如きもその一つである。……大乘仏教の哲学に於いても且又禅宗の經典中にあつても重要な位置を占めているものである。然るに諸種の理由（殊に至極難解のため）によって、此經の研究は殆んど為されていなかった。」ことを指摘し、たとえばそれが「覚書」の性格からくる困難さであったとしても、それ以上に宗教的「經驗」の確かなることの重要性に気付かされるのである。又「著者の智的洞察の透徹と禅的體驗の奥妙と直感的把握の鋭敏とが至妙に溶融して自ら成る壯絶の行文は快味津々たるものがある。」といって、此經の中心を成す主要教義は「自証聖智」であり、全ての論理的、哲学的、心理的説明はこの「自証聖智」が達摩の體驗内容であることを指すものである。之によって本經は、その存在理由を主張するのだといっているのである。

禅經驗の表出に関して、顕正は大拙の「禅の見方」について「宗教は先づ經驗を以って出発し、爾後に（広義に於ける）哲学が来るのであつて哲学的批判は、かかる事実に立脚して行はれなくては正鵠を失する。」と指摘する。故に禅經驗は「少なくともそれが禅的直觀の何らかの体系を持ち得る限り、諸種の禅的条件に規定せられねばならぬ」といっている。

宗教における「經驗」の重要性はその表現としての論理的、哲学的方向を決定するといっても過言ではない。經驗ありてしかる後に表現がなされる。この点について顕正は「発阿耨多羅三藐三菩提心」及び「發菩提心」の漢訳について次の如くいっ